

学 位 論 文 の 要 旨

論文題目 幼稚園の保育者の動物飼育に対する「知識」と「態度」の向上を図る試み
-幼児と飼育動物に配慮した「動物介在教育」の実現を目指して-

広島大学大学院生物圏科学研究科

生物資源科学 専攻

学生番号 D104136

氏 名 森 元 真 理

【第 I 章 緒論】

子どもと動物の関わりについての研究は海外で進んでおり、動物との関わりが子どもの心に及ぼす影響について様々な報告がなされている。その中で、生き物を介して子ども達の心を育む動物介在教育 (Anima; Assisted Education : AAE) が注目されつつある。子ども達の知性だけでなく心と身体、精神性の調和を兼ね備えた人格を育む「シュタイナー教育」とも共通しており、Steiner (1861-1925) は、幼児期は人間的な道徳性(「愛」や「勇気」など)に対して好感を発達させる時期であるとし、幼児期における心の教育の重要性を指摘している。そこで、わが国の幼稚園における心を育むための役割は非常に重要であると考えられる。

わが国の幼稚園では、子どもの心の発達を主な目的として動物飼育が行われてきたが、動物の管理に対する保育者の意識や対応には様々な問題のあることが指摘されている(中川, 2000)。しかし、動物を教育の場に介在させる前提として、適切な飼育管理が必須条件である(IAHAIO, 2001)。

そこで本研究は、幼稚園の動物の適切な飼育管理とその動物を介在した効果的な教育を実践するために、飼育動物として最も多く飼われているウサギを対象に、飼育管理の実態を明らかにするとともに、幼稚園と保育者の抱える問題を改善することを試みた。

【第 II 章 幼稚園における動物飼育の実態】

多くの幼稚園では、子どもの心を育むための一助として小動物が飼育されているが、管理状況についての調査はほとんど実施されていない。そこで本研究は、広島県内の 47 幼稚園を対象として主要な飼育動物種であるウサギの飼育管理に関する調査を実施するとともに、ウサギを飼育している特定の園を対象に、ウサギの管理状況(飼育管理および健康管理)を長期間観察した。

その結果、47 園を対象とした調査では、「ウサギの飼育管理状況」を主成分分析で、また「ウサギの状態」を 100 点満点で評価したところ、飼育管理の指標として「ウサギの QOL の向上に不可欠な管理項目」と「ウサギの生存にとって不可欠な管理項目」の 2 つの主成分が抽出された。主成分得点の散布図から、多くの幼稚園がウサギの QOL と生存に関する管理項目において不適切な状況にあることが明らかとなった。一方で両管理項目が適切な幼稚園はウサギの状態評価の得点が 90 点以上となる傾向があった。ウサギの管理状況(飼育管理および健康管理)を長期的に観察した調査からは、ウサギの QOL に必須である「掃除」や「給餌」などの基本的な飼育管理すら十分に行われていなかった。

以上のことから、幼稚園において飼育動物を介した動物介在教育を実現するには、まず不適切な飼

育管理状況を改善することが必要であり、そのためには、「飼育環境」「飼育管理」「動物の恐怖・不安」「行動・生態」「動物介在教育」に関する保育者の「知識」と「飼育環境」「飼育動物」「子ども」「動物介在教育」に対する保育者の態度（取り組み姿勢）を向上させることが必要であると考えられた。

【第Ⅲ章 幼稚園における幼児と保育者の飼育動物（ウサギとモルモット）との関わりの実態】

動物を飼育している幼稚園の保育者は飼育による教育効果に満足しているとされるが、不適切な飼育管理の幼稚園ではむしろ負の教育効果があるという指摘もある。そこで本研究は、幼稚園の保育者と年中児と飼育動物との関わりを約1年間にわたり継続的に観察してその実態を明らかにするとともに、卒園直前に幼児に面接調査を実施して、1年間の動物飼育が幼児の心に及ぼす影響を調べた。

調査期間中に半数以上の飼育動物が怪我や病気になり、死亡した個体もいた。幼児の飼育動物との関わりには不適切な場面が多く確認された。モルモットは、幼児の不適切な扱いがもとで怪我をし、その後まもなく死亡した。また、ウサギについても病気の症状が悪化していにもかかわらず治療を受けることなく放置されていた。さらに、保育者は幼児が飼育動物と関わっている時に不在のケースが多く、幼児が不適切な発言や行動をしても注意される機会がなかった。卒園前の面接では、飼育動物と関わりの頻度が日常的に高かった幼児でも、動物の病状やその死について自発的に話すことはほとんどなく、幼児と動物との関わりは希薄であった。このことから、保育者が期待する思いやりの心を育む教育にはつながっていないことが示唆された。

【第Ⅳ章 ウサギの飼育管理に関する保育者の「知識」の向上を目指して-ニュースレターの配布を通じた保育者への教育-】

第2章および第3章から多くの幼稚園で不適切な飼育管理の実態が明らかとなったので、本研究では、飼育動物ニュースレターを通して飼育に対する保育者の知識と意識の向上を図ることを試みた。広島県下の私立幼稚園31園を対象に7ヶ月間に渡って「飼育動物ニュースレター」を毎月郵送するとともに、アンケートを同封することで、動物飼育に対する教員の知識と意識の変化を調べた。その結果、ニュースレター配布後6ヶ月の間に、「飼育改善案」を実践した保育者の数は安定していたが、実践しなかった保育者の数は徐々に減少が見られ、期間の後半では両者の割合には有意な差が認められたことから ($P < 0.05$)、ニュースレターは一部の保育者の飼育に対する知識と意識の向上に一定の効果のあることが示唆された。

今後は調査時の保育者の意見を参考に、さらなるニュースレターの質の向上を図ると共に、保育者と直接的な意見交換が行えるような「動物飼育と動物介在教育に関する訪問活動や講習会」などを実践することが必要であると考えられた。

【第Ⅴ章 ウサギの飼育管理に関する保育者の「態度」の向上を目指して-飼育ウサギへの名づけが保育者の「態度」に及ぼす影響-】

第2章および第3章から多くの幼稚園で不適切な飼育管理の実態が明らかとなった。その原因の一つとして飼育動物に対する保育者の愛情や関心の低さがあるのではないかという指摘がある。本研究では、愛情と関心の指標として幼稚園の主要な飼育動物であるウサギの「名づけ」に着目し、広島県内47園を対象に飼育管理状況との関連性を調べた。その結果、ウサギに名前をつけている園の方がつけていない園よりも季節管理（暑さ、寒さ対策等）を有意に実践していたことから ($p < 0.05$)、「名づけ」行為と適切な飼育管理との間に関連性のあることが示唆された。さらに名付けについて質的な考察を行うと、管理が適切な園では外見に基づいた単純な「名づけ」よりも動物への思い入れを示す「名づけ」が多く認められた。子ども達の心を育むための動物飼育では、「ウサギ」といった概念的な総称として呼ぶのではなく、ウサギの各個体を認識した上で名前を付けることが望ましいと考えられる。

今後も飼育動物に対する「名づけ」を組み込んだ教育プログラムについて検討していきたい。

【第Ⅵ章 総括的考察および結論】

先行研究（谷田, 2001; 石田, 2005）から、多くの幼稚園が動物飼育の教育目的として「子どもの心が育つ」ことを挙げていた。しかし、本研究の「ウサギの飼育管理に関するフィールド調査（第2章2

節)」からは、教育の目的を達成するための積極的な取り組みはほとんど認められず、管理の悪い幼稚園ではウサギのQOLを最低限保障するための管理（掃除や給餌）すら不十分であり、保育者の保育者の飼育動物に対する「知識」と「態度」の低さが明らかとなった。「飼育動物が汚い」「病気にかかっている」「死亡した」等のネガティブな情報は子ども達の動物に対する嫌悪感や恐怖心を増幅させるとの報告もあり（Peterら, 2008）、そのような環境下では幼児が飼育動物と日常的に関わることが教育的に逆効果になるものと考えられた。

また、子どもは、「自分にとって重要な人」「養育にあたる人」「権威のある人」の行動を模倣されていることから、保育者の動物への接し方が子ども達と動物との関わり方に大きく影響を及ぼすと考えられるので、不適切な飼育管理状況にある幼稚園の保育者の「知識」と「態度」を改善させることは喫緊の課題である。本研究では、保育者の「知識」の向上を図る方法として動物飼育ニュースレターの配布効果を検証し（第4章）、「態度」を改善する方法として飼育ウサギに対する名付けに着目した研究を実施し（第5章）、いずれも保育者の「知識」や「態度」の向上の一助となる可能性が示唆された。

今後は保育者の「知識」や「態度」の向上を図るために、上記以外の様々な方法についても検討することで、幼児と飼育動物の双方に配慮した動物介在教育を実現を目指したい。特にわが国の場合は、ほとんど幼稚園が動物を飼育するという特殊な環境下にあるので、不適切な飼育管理を少しでも改善することは喫緊の課題である。また、改善が困難な幼稚園については、飼育を一旦中断して動物を飼育する以外の方法で動物介在教育を実践できる方法を検討する必要があると考えられる。また、飼育動物を通じた動物介在教育を積極的に実践したいと考えている幼稚園に対しては、幼児教育学や動物管理の専門家と連携して研究することで、保育者の「知識」と「態度」を高めながら、飼育動物の福祉に配慮した教育プログラムを開発したい。